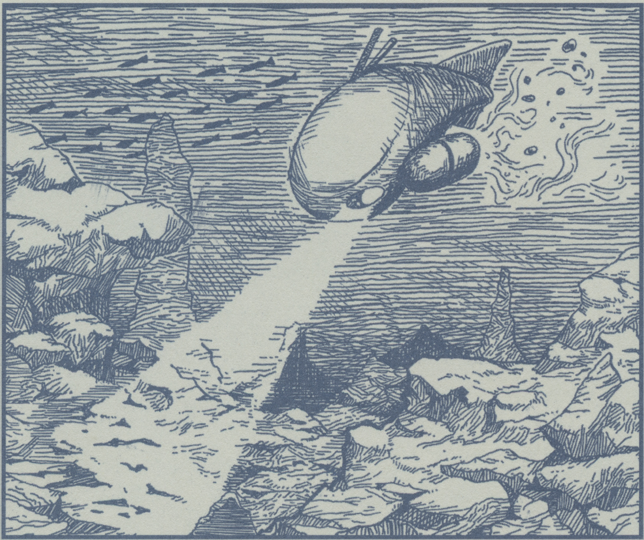
巨人島からの手紙
～The Story about "DoShin the Giant"～

連載第4回

作：DiscDriveTribe



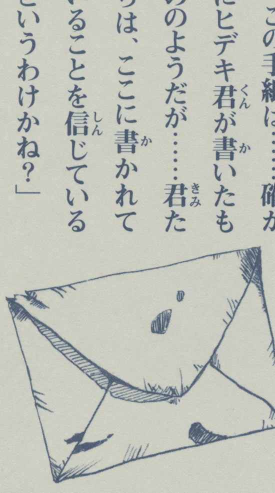
神秘の海に誘われて……

こうしてヒデキ兄さんは『巨人のドシン1』の世界に迷い込んだ……

　巨人が大暴れする島を潜水艦で脱出した俺は、今、深海を漂っている。太陽の光すら届かない暗闇の世界。海の秘密を人間はあまりにも知らない。この海には、いったいどんな世界が潜んでいるのだろう？　そう、俺が今脱出してきた、巨人の出現する島にたどり着いたのも、ある好奇心に突き動かされ、この海域を探索している途中でのことだった。

　俺が大学で専門に研究していたのは海洋調査の技術開発だ。無人の潜水艦にセンサーを搭載し、音波で海中の様子を探り、その結果を3Dグラフィック化するという作業をしていた。ところがあるとき、ある海域であまりにも奇妙なグラフィックが現れたのだった。俺はそれに大変な興味をひかれ、周囲には何も告げず、一人乗りの最新鋭潜水艦を借用し、実地調査を始めた。

ヨシノブは、昔ヒデキ兄さんと一緒に過ごした部屋で、この手紙を読んでいたのですが、そのとき居間からこんな会話が聞こえてきました。
「本当に残念なことではありますが……安否が不明ということであれば、とりあえず休学の手続きをされてはどうでしょう？　彼の研究室のほうも引き払うということに……」
ヒデキ兄さんの通っていた大学の関係者でしょうか。まるでヒデキ兄さんが、もう帰ってこないとでもいうような、その口調にヨシノブは頭にきてしまいました。でも、兄さんが生きていることを証明するには、どうすればいいのでしょう。手紙に書かれていたように兄さんの研究室へ行ってみれば、何か手がかりがあるかもしれません。
兄さんとの約束を破ってしまうことになりますが、仕方ありません。兄さんからの手紙を思い切ってみせると、あっさりとタカコ姉さんは「たしかに、これはヒデキさんの書いた字ね」とみとめてくれました。
「わかった、いきましょう。研究室には、何度かお邪魔したことがあるからきっと大丈夫よ」
ドアを開けると、薄暗い研究室には、コンピューターや見慣れない装置が置かれ、棚や床には資料らしきファイルが乱雑に積み上げられていました。この中から兄さんの居場所に関する手がかりを見つけるといっても、どうすればいいのかまったく見当がつきません。
「困るな、部外者は立入禁止なのだが」
二人の背後で声がしました。ふりかえると、いつのまにかそこには先日ヨシノブの家を訪ねてきた大学関係者の老人——カワカミ教授——が立っていました。
「申し訳有りません、でもこれにはワケが……」タカコ姉さんがあわてて事情を説明しはじめました。
「ほう、ではその手紙というのを読ませてもらいたいものですな」
仕方なく、ヨシノブはヒデキ兄さんからの手紙を手渡しました。カワカミ教授は老眼鏡をとりだし、便箋をのぞきこむように目を通しはじめました。
「この手紙は……確かにヒデキ君が書いたもののようだが……君たちは、ここに書かれていることを信じているというわけかね？」







自分の開発した装置が描き出した世界を、実際にこの目で確かめたかったんだ。

その海域で俺が見たのは、なんとも非現実的な世界だった。

一部は朽ち果てているものの、まだ真新しい古代ギリシャ風の神殿。沈没した中世の大型木造船。インドネシアのボルブドール遺跡や、クフ王のピラミッドによく似た建造物、宇宙人のような紋様が刻印された巨大な塔、苦悶の表情をした人間の顔がきざまれた岩石。数億年前に死滅したはずの古代魚は生きている気配さえないものの、冷凍保存されたかのように美しい形態を保っている。

それは時代と空間が支離滅裂にコラージュされた世界だった。

この世界には人間の足跡もくっきりとのこっていた。形状はまちがいなく人間の足跡ではあるのだが、サイズがあまりにも大きい。巨人の足跡だ。これがある地点を出発点に、途中ではたと途切れていた。この巨人は一体どうしたのだろうか?

この足跡の向かう方角に進んでいき、俺はあの巨人の出現する島にたどり着いたのだった。

兄より

ヨシノブもタカコ姉さんも、答えに詰まってしまいました。カワカミ教授は、困ったように首をふり、そして語りはじめた言葉は、なんとも意外なものでした。

「私には……ヒデキ君の伝えようとしていることが、わからんでもないがね。私と彼の学説……つまり海の奥深くには、すべての生命発生の源があり、神話の原型、文化的DNAの配列までもが記録されているという説だが……。これを証明するための調査を私と彼は続けていたのだ。しかしヒデキ君の研究の進め方はいささか危険すぎた。彼は調査データを直接脳に取り入れ視覚化し、潜水調査でも肉体の限界を超えた深度へと挑んでいった……。その過酷な実験が彼の精神や肉体になんらかの影響を与えたことは確かだろう。そう、そして、この手紙に書かれている潜水艦のことだが……これは、ある国際的な海洋研究機関が開発しているものだ」



ヨシノブとタカコ姉さんの次の行動が決定したのでした。

（次号に続く）

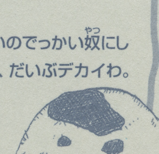
DDT通信 その4

10月号

もうすぐ、NINTENDOスペースワールド！『ドシン』ブースにカモン・キッズ！どっぷりと遊んでくださいな。本来、ゲームは自分の部屋でこっそりやってこそ、その魅力がジワリジワリとクるってもんだけど、それは発売されてからのお楽しみってことで、今回はまず軽く触ってみ。でも、「試遊」とか「チェック」とか言って、すかしてんじゃないわよ、勝負ですからね、勝負！ 俺らと君らのタイマンだ。ちょっとでも「おもろ…」と思ったら、こっちの勝ち。ぜひ、発売されたら買ってください。逆に「つまんね…」と思ったら、こっちの負けだ。潔く兜を脱ごう。でも、よくよく考えてみたら、おもしろいかもよ？

どっちにしても、買って買って買って！ ワーオ！ 僕、今、かなり興奮してます。イェーイ！ 制作期間3年の労作の初お披露目なんですもの。恥ずかしー！でも、嬉しー！ というわけで、会場には3日間びっちり張り付いていますよ。『ドシン』ブースの前で、勝っただの負けただの買って買ってだのと、ギャアギャアわめいている30男がいたら、それが俺だ。よろしくね。

あ、そうそうドシン・バルーンもブースに設置される予定なんです。200mくらいのでっかい奴にしたかったんだけど、現実は厳しく、10mくらいのサイズにおちつきそう。それでも、だいぶデカイわ。馬場さんの5倍だからね。膨らませるのも移動させるのも一苦労。だけど、幕張に来れないみんなのために、このドシン・バルーンを持って全世界をキャラバンしたいな。その為にも、早く発売元決まんないかなぁ。しかし、この段階で発売元未定っていうのも凄い…。とにかく、何もかもが前代未聞で、皮肉なしに愉快痛快。



『巨人のドシン1』
●
ディレクター
飯田和敏